

## アボリショニズム研究；

## 「太平洋の誘拐者

スナッチ・スナッチシップ  
—強奪・誘拐船—

アンソニー・G. フルード著

徳島 達朗訳

## 訳者まえがき

本稿は、Anthony G. Flude, *PACIFIC KIDNAPPERS THE SNATCH-SNATCH SHIPS* (©2000) の全訳である。内容としては、前稿「太平洋に展開する Blackbirding」<sup>1</sup> と重なる時空の歴史である。この論文はフルード氏がインターネット上に展開しているもので印刷物として刊行されてはいない。このリンクのなかに、筆者の当面する研究課題(「太平洋のブラックバーディング」)に直結する本論文が含まれていたため、筆者のアボリショニズム研究の経過を説明し、『エコノミクス』への翻訳掲載を申し出たところ、著者の快諾を得たので以下翻訳する。

フルード氏はニュージーランドの歴史家、研究者、作家である。1970年以来、イギリス人のニュージーランド入植の歴史を手がけており、今回翻訳し

---

1 徳島 達朗「アボリショニズム研究；太平洋に展開する Blackbirding」九州産業大学『エコノミクス』第6巻第1号掲載，2001年9月発行

た「太平洋の誘拐者」以外に「ヘンダーソンの工場」、「最初の移民船」、「女性のパイオニア」、「1860年の金鉱ブーム」、「ニュージーランド初期の捕鯨」、「太平洋諸島間交易」などがあるが、これらをインターネット上で読めるようにリンクを張っている。

[リンク] *PIONEERS IN NEW ZEALAND and the SOUTH PACIFIC*.  
<http://homepages.ihug.co.nz/~tonyf/snatchsnatch/>.

(2001年10月25日記す)

太平洋の誘拐者、ヨーロッパ人がそのように呼ぶ「ブラックバーダー」<sup>2</sup>なるものは、1863年、太平洋への長い航海を開始し、その最後の「スナッチシップ」は約十年後まで記録をとどめている。

この時期より以前は、島嶼からの人集めは小規模に行われていて、原住民のグループが二年契約でサモア、フィジ、ペルーのプランテーションで働くために連れ出された。二年が過ぎたら彼らの島々へ返される筈であった。約束された賃金、島への送還は多くの場合守られなかった。もっと多くの労働力が欲しいというプランテーション経営者からの需要は高まりつづけたが、人集めは困難になってきた。

労働力としての島民を積荷として確保するために、一人当たり2ポンドで問題なく契約に入れるように船主と船長に現金を提供することが必要であった。

1862年、南アメリカ、ペルーのカヤオ港は世界で最も荒っぽい、無法の海港であるという評判であった。そこは脱獄者、商人、グアノ採掘者、前科者

---

2 本人の意志を無視した奴隷売買をブラックバーディングと呼ぶが、正式の契約との境界は判然とはしていない。植民地政府はいちおうブラックバーディング反対の立場をとりながら、植民地経営の都合上、あまり厳しい取締りは行わず、20世紀初めにクイーンズランドが契約労働者の入国を禁じるまで、最終的な解決には至らなかった。ブラックバーディングを含む労働力徴集で移動させられたメラネシア人の総数は10万人と推計されている。一方、少数ながら、1860年代に奴隷制廃止のギャップを埋めるべく、南米ペルーへポリネシアからの労働力徴集が行われた。総数で3600人余りと推計されるが、その多くはだまされたり誘拐されたポリネシア人で、まさにブラックバーディングであった。国際世論の批判を浴びて中止となったが、船旅や慣れない労働で大半の人々が命を落としたのであった。(『オセアニアを知る事典』平凡社、1997年)

など、あらゆる荒々しいタイプの人間が頻繁に出入りする場所であった。この人殺しと犯罪の無法の町では、自衛のためのピストル、ナイフ、棍棒などを持たないで外出するような者は一人もいなかった。

カヤオは有名な「奴隷商人」の市場となり、市場ではコーヒー、コットン、砂糖のプランテーションあるいは銀山で働かせる労働集団として、大勢の太平洋、アフリカから来た、強壮な原住民男女を買うことができた。

冷酷な船主、船長がペルーのプランテーションで働かせるために、「現地民」を満載してカヤオにもどってきたので、1863年には、もうかる「奴隷労働」市場は拡張された。その後、他の船は、フィジ、サモア、オーストラリアのクイーンズランドのプランテーション経営者からの需要にこたえて労働力を供給した。

ペルーの旗を掲げた最初の小船団が、カヤオを出港し中央太平洋の島々へと向かった。デロレス・カロリナ号、ポリネシア号、ホノリオ号は4300マイルを航行して太平洋を渡りプカプカ諸島に結集するために出港した。そうした船の一隻であるマルガリタ号は行方不明となり二度と現れなかった。三隻はエリス群島の小さな島ヌクラレを目指し北西に進路を取った。

ペンリン・アトルではもう一隻の船、アデランテ号がカヤオへ帰るところで、すでに77名の男、73名の女、15名の少年、33名の子どもが積み込まれていた。彼らは銃を突きつけられて村から引き離され、鯨ボートで本船に運ばれつみこまれたので驚き当惑した。ハッチが落とされると暗い船倉に集められた。

ヌクラレの小さな島に着くと、デロレス・カロリナ号は海岸へ接近し、人々に向かって歓迎するから船上に来るように呼びかけた。疑いをいだかない島民は泳いだり、カヌーで船に近づき、男も、女も、子どもも、白人がココナッツ油、コプラ、貝殻と交換に差し出す安物の宝石類を見ようと喜んで甲板に群がった。

興奮した島民が甲板に集まると、船員たちは船長の合図で大きな岩を舷側から投下し華奢なカヌーを沈没させた。ただちに、錨を上げて出帆の命令が下された。

250名以上の島民が連れ去られたが、これは島民の80%にあたる。海上に出

ると、デロレス号は僚船と合流し、次の目的地フナフティ諸島へ船首を向けた。

ホノリオ号を島に入れることに決定した。同様のやりかたで成功し、合計171名の男、女、子どもが船に積み込まれた。後には老人、病弱の者、幼児が取り残された。

船団は船首を南に向けフランス領ポリネシアに向ったが、ペルーのカヤオへ戻る最終コースへ入るまでにヌクフェタウで1名の、ロトゥーマ島で3名の島民を積み込んだ。2隻の航海で、合計428名の奴隷労働者[アデランテ号は198名]を積み込んだ。カヤオへの帰路78名が病気と栄養失調で死亡した。

1864年、カヤオ船籍のメルセデス・アディ・ホーレイ号は、フランス領ポリネシアのパウモトゥ群島で計略と餌で152名の島民を乗船させる事に成功した。

食料と水が乏しかった。

パピートの港に入り食料の補給をした事が破滅であった。フランスの官憲に捜査され人間の積荷が発見されたのである。

スペイン人の船長、ジュアン・バウリステ・ウニバソは「奴隷貿易」の罪で逮捕された。彼はフランス法廷で5年の重労働の判決、船主は18500フランの罰金を課された。

もう一人のドイツ国籍の士官、彼は通訳とパイロット役であったが、10年の重労働を宣告された。

「ブラックバーディング」は継続していた。1865年の第2回目の航海でデロレス・カロリナ号は、プロア諸島で122名のポリネシア人に銃を突きつけて、労働力を「調達」した。彼らは全員、市場で最高の値段をつけた者に奴隷として売るためにカヤオに陸揚げされた。

ペルーに最も近いラパヌイあるいはイースター島は1863-1867年の間、機会あるごとにペルーの奴隷船に襲撃された。ヘルモサ・デ・ロレス号は、1隻で138名の男と22名の女をイースター島から船に乗せカヤオに上陸した。同船は他の航海では25名の女と45名の子どもを運んでおり、他の船も襲撃を続け、ついに同島の人口はほとんど完全に無に近くなった。

カヤオ港からの最も荒々しい船員の乗り組んだ、片目の冷酷なスペイン人

船長に率いられたエンプレス号の到着後、1875年には、他の二島も島民がほとんどいなくなってしまう。

同船はサンドイッチ諸島としても知られる、デューク・オブ・ヨークならびにデューク・オブ・クラレンス諸島に向かい、武装した一隊を上陸させたあと、船員が剣と鉄砲で島民全員を狩り集めた。恐怖にさらされた島民は海岸に追い出され、鯨ボートに押し込まれ、本船に乗せられた。島にはほんの少数の老人男女、数人の幼児が残された。

1863年に、ある新聞はペルーの「スナッチ・スナッチ」船、ローザ・ワイ・カルメン号が、ペルーのカヤオへ帰る途中、サンデイ島 [ラウル島] での様子を詳細にレポートした。

同船は、トケラウ諸島、ノーザン・クック、イースター島で徴発した300名近くの島民を乗せていた。チフス熱が船内に広がり、食料と水が不足した。当時サンデイ島には数人の住民とその子どもたちが生活しており、きれいな水が流れていた。

船長は病人たちを同島に上陸させるよう命じた。島で100名以上が死亡し埋められた。住民は感染し死亡したが、カバトと彼のサモア人の妻は例外的に生き残った。

同船を洗浄し消毒したのち、船員たちは上陸し、出帆の前に食べられるものをすべて略奪した。

病原菌がまだ島に残っていることを恐れて、カバトと妻は、新鮮な水の補給用に保有していた、鯨をとる船ゲムで島を離れた。

このような奴隷商人の活動は、他の国の冷酷な船長の耳に入らない筈はなかった。全員が熱心に喜んで労働力供給の契約をおこなったが、そこでは大金が行き来した。

北部オーストラリアやクイーンズランドは1864年に植民された。砂糖や綿花プランテーションがブリスベインの北側に建設され始め、じきにそこで働く労働力が必要になった。

現地で雇用することは不可能なので、植民者はそうした業務をおこなう船主ならびに船長を探し求めた。彼らは口約束と現金前金で業務をおこない、太平洋諸島からの「労働者」のグループを強制的に駆り集めることになった。

ソルティ・ドッグ号の船長ボビー・ダウズは、このような方法でオーストラリアのプランテーションに供給する第一人者であると評判になっていた。

もう一人のオーストラリア人アルバート・ハウベルはヤング・オーストラリアン号の士官であるが、1869年にフィジのプランテーション用の徴用のために、「ブラックバーディング」に出向いた。彼は船首をヴェヌアツ群島に向けた。

彼は自分の船の船倉で島民に発砲、斧で殺したことが判明し、後にシドニー高裁で絞首刑を宣告された。

彼は上告し好運にも死刑を免れ、国外追放となりオーストラリアを離れた。

フィンレイ・マクリーヴァー船長は1871年にヌクラウ号を指揮して、銃をつきつけて80名のソロモン諸島民を捕らえ誘拐した。フィジへもどるまで島民を手錠で拘束し船倉に閉じ込めておいた。

彼らは夜中にこっそりとタウヴェヌイに陸揚げされ、当地のプランテーション経営者に買い取られた。

アメリカ人の海賊、「弱いものいじめの」ヘインズ船長が、このような活動に参入してきた。1869年、サモア滞在中、彼は大プランテーション経営者シヴァーライト氏と労働者募集の契約を結んだ。ヘイズはその時、すでに「スナッチ・スナッチ」航海を行うことを決意していた。

彼はアトランティック号に乗りマニヒキ島に入り、仕事と賃金を約束して数名の島民を確保した。

彼の好運を予測することなど誰にもできないことだが、彼は結婚式の一団を近くの島ラカハナ [26マイル] へ運んで欲しいと頼まれた。彼は輸送費用の話がまとまった後、喜んで全員を乗船させた。成人男女、子どもの一団は着飾って結婚式のフィナーレとして甲板上で群れをなして踊った。

航海が始まり、ヘイズ船長は最初は北へ、それから西へと舵を切った。突然、乗客たちは船が彼らの目的地ラカハナ島からそれていることに気づいた。彼らは口々に気づいたことを叫んだ。しかしヘイズは、プカプカ [危険な島] へ最初に寄らねばならないと言った。マストの上に島民の水先案内人を乗せて、同船は危険な珊瑚礁に注意しながら、ラグーンへの狭い水路を無事に通り、投錨した。

数名の労働者が乗船し、じきにアトランティック号は、大洋に船首を向けた。乗客は下部のデッキに収容された。船はアピア、サモアを目指し、前記の島民たちは欺かれ、サモアのプランテーションの労働者と合流する運命が待ち受けていた。

1864年にイギリス政府はペルー当局に大々的な誘拐について、抗議した。その結果、連行された島民の若干名がカヤオから帰島された。

ペンリン諸島民のうち帰島の旅で生還した者は皆無であった。全員がペルーで死亡していた。エレン・エリザベス号の場合は、準備ができてカヤオから111名の太平洋島民を乗せて出航したが、彼らはキングスミル・グループの誘拐によってグレート・アイランドから連れてこられた者たちであった。

この船は悪天候下、ペンリン・ラグーンへ入ったが、船長はこれ以上先へ進めないと行って全員を投棄した。同船は翌日出発しペルーへ戻った。置き去りにされ、自分の島へ帰る望みを絶たれたギルバート島島民は、大部分が男であるが、取り残されていた150名の住民とともにペンリンに残留し、異人種間の結婚も行われ、島の生活に自分たちの文化も取り入れて行った。

他の送還船、バーバラ・ゴメズ号の場合は、カヤオを出発してタヒチへ向う予定であったが、乗船し出港を待っている間に、470名の乗客の内、162名が天然痘で死亡し、残りの318名も罹病している事が判明した。

同船の船主は生存者をフランス領ポリネシアのポウモツ群島の南端の小さな孤島ラパへ送ることにした。しかしながら、さらに277名以上が航海中に死亡し海上投棄された。15名はイースター島に、残りの16名がラパに上陸させられた。

奴隷貿易の行われている間に、雇用主や船主にとってポリネシア人は西欧社会では容易に生き残ることができないということが明白になってきた。メラネシアからつれてくる方が良いと思われた。

メラネシア人の運命は捕らえられるとすぐに決定的となった。彼らは獲得されると、船倉に集められ解き放たれたが、時には手錠をかけられた。すし詰め状態で下部甲板に入れられたが、彼らは逃亡したり船員を傷つけたり船を破壊することは不可能であった。

航海の間、ココナッツと少量の米あるいは魚が少量の水とともに与えられ

たが、常に食料は不足し多くの場合、ペルーへの長い航海を生き残ることさえできなかつた。

カヤオの奴隷貿易港に上陸後、彼らは予約に基づいてプランテーション経営者に買い取られ、一般的には明け方から夕方まで働く事になる。少数の幸運な者はカヤオの金持ちの召使や庭師として売られるか、ペルーの首都に近いリマへ送られた。

初期には罹病率が高く、天然痘やチフスでの死亡が突出していた。南太平洋諸島の島民たちは白人の病気に対する免疫がなく、到着後一、二ヶ月で多くのものが死亡した。慣れない食物のせいもあって赤痢や腸疾患による死亡率は高かった。また、プランテーションでの長時間労働でも死亡し、その場に埋葬された。

一方、このような死亡と病疫を埋め合わせるために、他の原住民が「スナッチ・スナッチ」船で連行された。1875年に、カール号、エンプレス号などの船団がサンドイッチ諸島を襲い、銃を突きつけて164名の原住民を奴隷としてカヤオに連行した。

アピアのイギリス領事、A. ウィリアムズ氏は、1872年にロンドンの外務省宛に、ニューエル卿から受けとった情報および伝道記録を送って注意を喚起している。報告書によると、プカプカ島の人口はおよそ300名に減少しており、マニヒキでは500名、ペンリン環礁では150名であった。ヌクノノ島のトコラウ群島では、たったの80名の住民が生存していた。これは1863年に誘拐が開始されて以来、1000名の島民が連行されたことを示している。

イギリスおよびドイツ政府は、領事からの報告で太平洋地域で奴隷貿易に組み込まれた現地住民の人数が明らかになってきたので、再び奴隷労働の調達に対して、ペルー政府に強力に抗議した。

最初はこの抗議は無視された。というのはペルー政府は他国も島々から奴隷労働力の輸送に従事しているのを知っていたからである。しかし、後日、ジェスチャーとして、ペルーはディアマンテ号で69名の生存者を彼らの島へ送り届けた。

イギリス外務省は1872年に太平洋諸島民保護条例を導入した。この条例は、イギリス臣民 [オーストラリア人] がクイーンズランドのプランテーション



のために「奴隷労働者」を手に入れることを規制し、航海中の処遇および砂糖プランテーションでの労働がもっと人間的に改善することが企図された。

奴隷貿易は1876年に徐々に終了に向かい、カヤオの港から出港する船はなくなった。太平洋の島民はまだ新鮮な水を求めて、正体不明の船が島に近づくことに不安感を抱いていた。プランテーションのための労働力の需要はその後数年継続した。さまざまな政府あるいはエージェントから任命された誠実な人材募集エージェントは、離れた海岸への上陸に気をつけなければならなかった。

1881年、五年後に、ニュージーランド人、ギルバート・メイアーはシドニーから来た政府の人材募集の船、ホーキンス船長のイザベラ号に乗り、ニュー・ヘブリデスのエスピリツ・サントスの小さな島に上陸する準備をしていた。

メイア船長と彼の部下は鯨船で海岸に注意して接近した。そしてそこには婦人、子ども以外全然いないということに気づいた。彼および船員が砂浜に足を踏み入れると、原住民の一団が木から飛び降り攻撃を始めた。メイアは他の船員とともに打ち倒された。他の乗員はボートを急回転させ、気も狂わんばかりに漕いで沖へ出ようとした。投げられた槍や斧が彼らの近くに命中した。一方彼らはライフルを海岸の原住民の一団に向けて発射した。

スナッチ・スナッチ誘拐時代の十年間、3000名近くの島民が彼らの故郷の島から暴力で連れ去られたと推定されており、その後も長期間にわたり、太平洋諸島の人口数は低迷状態を抜け出せなかったのである。

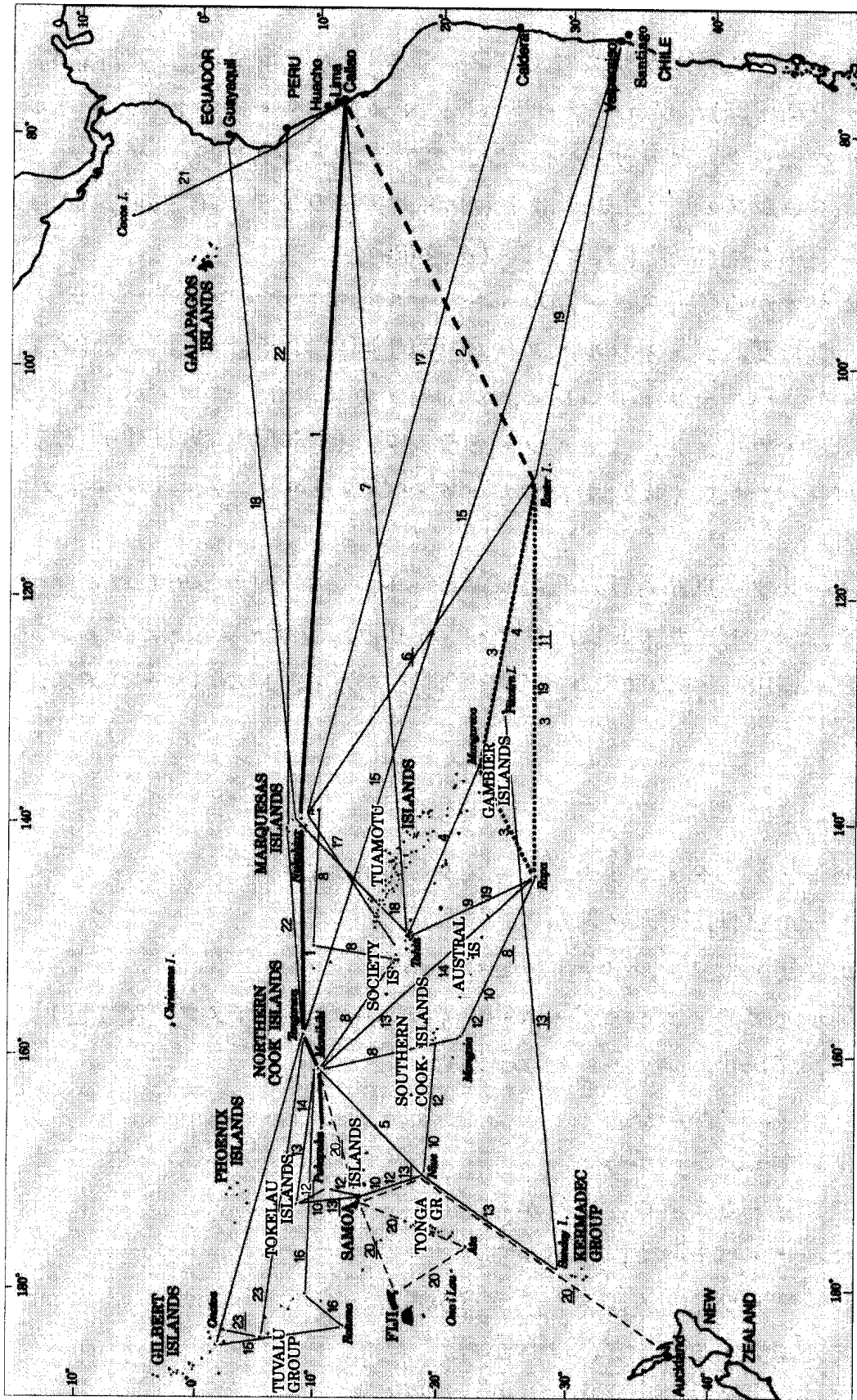
表1 スナッチ・スナッチ・シップ (強奪・誘拐船)

船名	船籍港	年	地域	連行人数
アダランテ	*カヤオ	1863	ペンリン島	198
アトランティック	**アピア	1869	マニヒキ, ラカハナ	160
バーバラ・ゴメズ	カヤオ	1864/67	送還船	318
カール	カヤオ	1865/67	フクアフォ島	247
デロレス・カロリナ	カヤオ	1863	フナフティ/ヌクラレ	130
同上	同上	1865	プロア諸島	122
ディアマンテ	カヤオ	1864/1868	送還船	98
エレン・エリザベス	カヤオ	1873	ツアモツ群島	111
エンプレス	カヤオ	1875	サンドイッチ島	164
ヘルモサ・デ・ロレス	カヤオ	1863-67	ラパヌイ/イースター島	225
ヘレナ	カヤオ	1867	ファカウフォ/アタフ	146
ホノリオ	カヤオ	1863	フナフティ	171
ジョゼ・カストロ	カヤオ	1874	ブカブカ	156
ケストレル	***プリスペイン	1871	ツアモツ群島	162
マルガリタ	カヤオ	1863	行方不明	
メルセデス・アディ・ホーレイ	カヤオ	1863/64	タウモツ群島	152 (解放)
ヌクラウ	プリスペイン	1871	ソロモン諸島	80
ポリネシア	カヤオ	1863	フナフティ/ヌクラレ	113
ローザ・ワイ・カルメン	カヤオ	1863	トケラウ/クック/イースター	300 (チフスで死亡)
ソルティ・ドッグ	プリスペイン	1864	ツアモツ群島	160
シェナドア	カヤオ	1874	ソロモン群島	175
ヤング・オーストラリアン	プリスペイン	1869	ヴェヌアツ諸島	150

訳者註\*ペルー, \*\*アピア Apia, 現在は南太平洋の独立国, 西サモアの首都。\*\*\*オーストラリア東部, クイーンズランド州の州都。

## [附図]

ポリネシアのブラックバーディングの舞台を示す地図と, そのルートを示しておく。出典: H. E. Maude, *Slavers in Paradise, The Peruvian Slave Trade in Polynesia, 1862-1864.*



## 主要ルート

1 カヤオからマルケサスおよびノーザン・クック群島へ。[連行船名] アデランテ (第1回), ジョージ・ザハラ, マヌアリタ・コスタス, トウルジロ, アプルフマック, エリザ・メイソン, アデランテ (第2回), ゲナラ, エムプレサ, ドロレス・カロリナ, ポリネシア, アデランテ (第3回), ゼネラル・プリム (第2回), ディアマント (送還航海)

2 カヤオからイースター島ルート。セルピエンテ・マリナ, ベラ・マルガリタ, テレザ, ジェネラル・プリム (第1回), コラ, カロリナ (第1回), ギレルモ, ヘルモサ・ドロレス, ジョゼ・カストロ, ロザ・パトリシア, ロザ・ワイ・カルメン, ミカエラ・ミランダ, ロザリア, カロリナ (第2回), バーバラ・ゴメズ (第2回), ウルメタ・ワイ・ラモス, バーバラ・ゴメズ (送還航海)

3 イースター島からラパへの南部ルート。コーラ(マンガレヴァ経由), ギレルモ, ジョゼ・カストロ, ロザ・パトリカ, ロザ・ワイ・カルメン, (マンガレヴァ経由), ミカエラ・ミランダ, ミステイ, バルバラ・ゴメズ, (送還航海)

## その他のルート

- 4 セルピエンタ・マリナ, イースター島から。
- 5 トウルジロ, マニヒキから。
- 6 エリザ・マソン, ファトゥヒヴァから。
- 7 メルセデス・エイ・デ・ホーレイ, バーバラ・ゴメズ (第1回)
- 8 エンプレサ, ファトゥヒヴァから。
- 9 コーラ, ラパから。
- 10 ギレルモ, ラパから。
- 11 ジョゼ・カストロ, ラパから。
- 12 ローザ・パトリカ, ラパから。
- 13 ローザ・ワイ・カルメン, ラパから。
- 14 ミカエラ・ミランダ, ラパから。
- 15 エレン・エリザベス, トンガレヴァから。

- 
- 16 ドロレス・カロリナ, ポリネシア, ホノリオ, プカプカから。
  - 17 ラ・コンセプション
  - 18 ガヤス
  - 19 ミスティ
  - 20 ワーラー・グレシアン
  - 21 アデランテ (送還航海)
  - 22 エレン・エリザベス (送還航海)
  - 23 アデランテ, トンガレヴァから。

**註**

- 1 東への航海は下線を付してある。